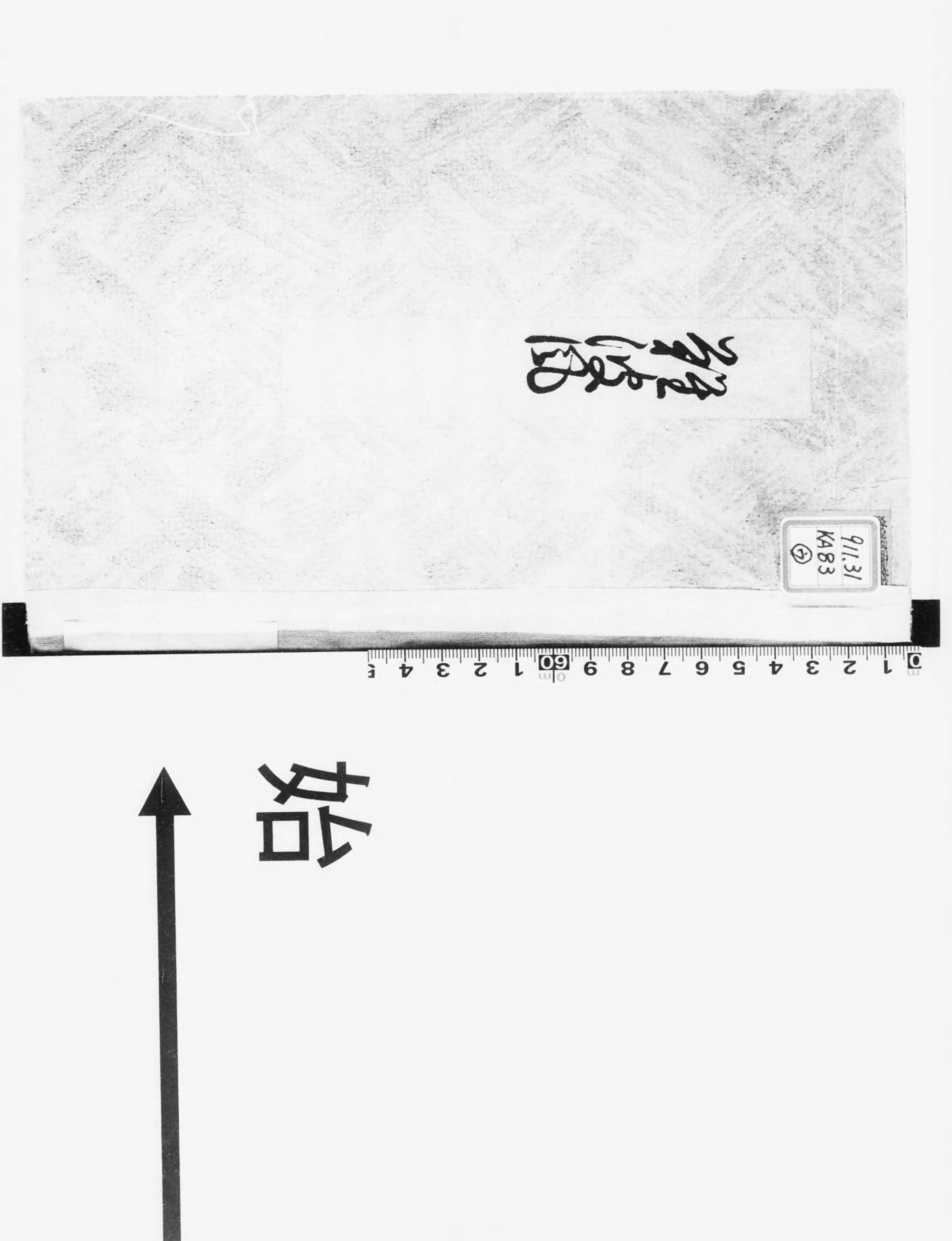
911.31
KA83
(1)



911.31
KA83

西南學會圖書館藏

西鶴俳諧叢書　第三卷

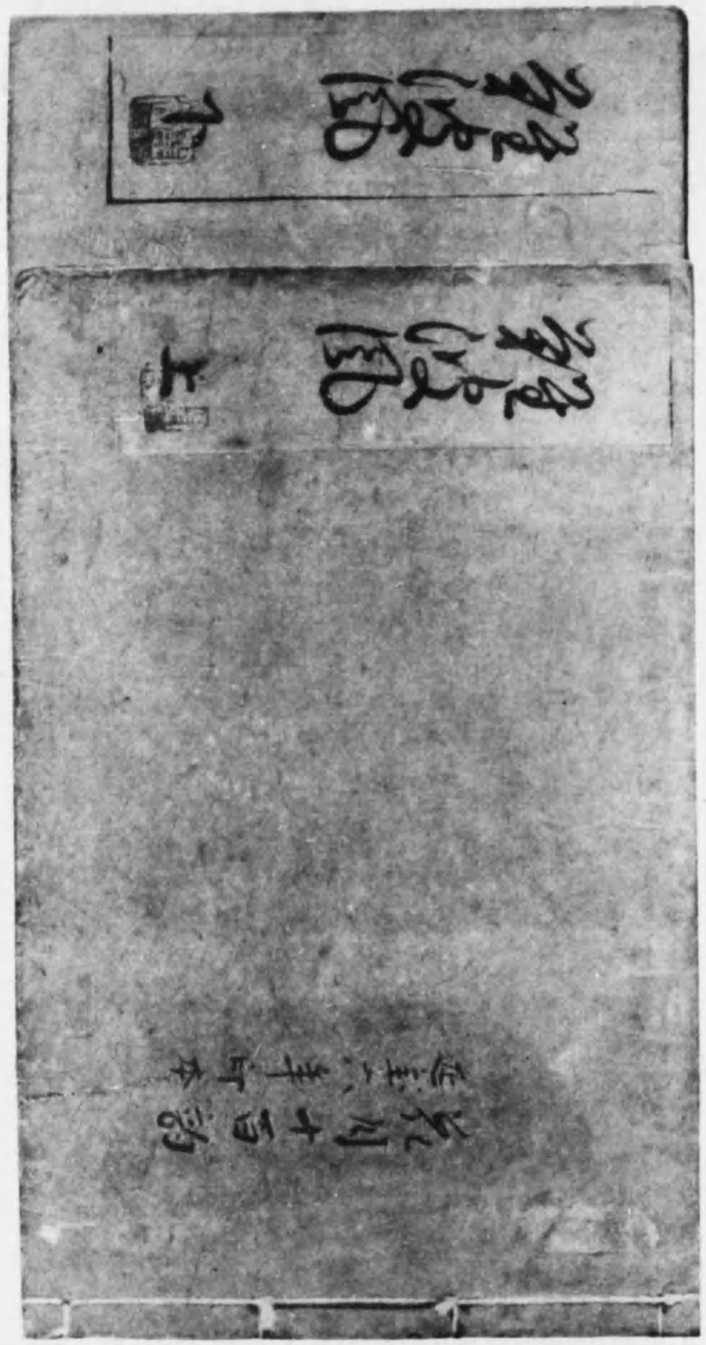
難波風

片岡旨恕撰
瀧田貞治校

無名氏寄贈本

難波風　正誤

	正	誤
一七頁　四行	文車	文庫
五三頁　一二行	年か藥	年の藥
六三頁　一一行	口話	口舌
七三頁　八行	庵はたらき	庵はたゝき



先集草枕の夢も見つかて二とせあまり程ふるを友
人にそゝのかされて又旅の世に旅ねの三吟をはし
め十といふものあつめたりひたすら指合をかへり
見す是非にかゝはらねは追加とするにもあらぬ
我たつかたの難波風高うふくといはゝいへ

松門亭旨恕

延寶六戊午八月日

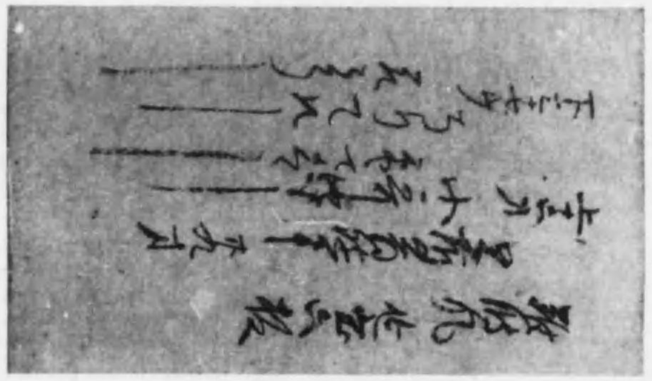
国立図書館
昭和 23.6.30
寄贈

花月十百韵目錄

第一　花　　梅翁　旨恕　任口

第二　月　　旨恕　貞因　西鶴　昌本

第三　花　　保友　旨恕　梅翁



第四月

次旨以梅　末恕仙翁

第五花

次旨梅如　末恕翁見

第六月

胤旨友宗　久恕雪先

第七花

如旨幸空　見恕方翠

第八月

重旨幾益　直恕音友

第九花

宗旨春吉　恭恕良眞

第十月

追加櫻

旨恕　次末　梅翁　定俊　任他　梅翁　旨恕

宇治興聖寺におゐて

三吟

御座らねと花こそ主今以　梅翁
相かはらさる庄薗の春　旨恕
蛙鳴鋤鍬あまたよせられて　任口
味方はわつか一村の里　翁
菱垣の竹よりおくや深からん　恕
なかめてけりな盗人月影　口
白露のふる長持は任他　翁
樂屋淋しき秋の夕くれ　恕
半疊に寂蓮西行膝をつき　口
院の御前に爐を切られけり　翁

戸はり帳今織にては叶ふまし　恕
鋏かね持と聞及にし　口
請人は取すましたる千話文有　翁
あかてわかるゝ後の出かはり　恕
前乗は思ひ初にし秋の色　口
はたことまりに小男鹿の聲　翁
跡付や枕の山に月更て　恕
夜半の時雨にかつはと目覺す　口
板庇あれにし後は無用心　翁
しほやく煙よう消た迄　恕
一かたり残る河原の水桶に　口
けふはよつほとたまる茶の錢　翁
ちいと姥心やすくや送るらん　恕
杖柱には高砂の松　翁
草臥て立よる陰は鐘つき堂　口
扨〳〵長い聽聞の場　恕

それよりは二百余才の秋の空　翁
夢も身にしめお蝶と寐たりや　口
月影や大夫についてまはる覽　恕
松風村雨只ぬれの段　翁
たふ〳〵と目もとに塩か泣かゝり　口
やさしきこはねは山郭公　恕
草の庵に住へき人とは思はれす　翁
雲の上猶はるかな隱居　口
作る詩は龍の吟する斗也　恕
青海波にはよすする唐船　翁
長崎や事皆つくす商ひに　口
天下にしれてあはうといはるゝ　恕
頬けたを扨こそ額にもうたれたれ　翁
富士か自慢か三尺手拭　口
峯の雲先取あへす夏帶に　恕
行水あかりの空か凉しい　翁

燒懸や風にはつはの額髪　口
人待比はそはからせかする　恕
夕暮は袖行水のとうと出て　翁
兩馬かあひををよく川越　口
大將と見れは瓢簞さけられた　恕
いたつらものゝ呑手之けり　翁
月花の中尊や此はくちうち　口
釋迦の頭も乱れ小柳　恕
床入や霞む川そひにふんそつて　口
なみたの淵やぬきて成らん　翁
中綿を見れは思ひのいやましに　恕
父かなけきや鰒にのこれる　口
代〳〵のあつたら跡をも立られす　翁
新地法度に大きな寺も　恕
ひらかはや三界すほき傘を　口
そこて一味のあめねふらせて　翁

子共迄敵の方にとられけり　恕
火爐のやくらくはらりと崩るゝ　口
かせ所帶破れふとんや殘るらん　翁
後の朝の女夫いさかひ　恕
何やらん文にはあらぬよまひ言　口
しんきのとくや月に村雲　翁
思ふやうにならぬ世間露時雨　恕
踊も笛もしまぬ夕されぬ　口
むつかしき町年寄の又しては　翁
會所におゐてかたい前句を　恕
煎小豆の丸のみ何の味もなし　口
炮烙千にひとつの分別　翁
堪忍のしにくい所頭巾也　恕
大和田の座禪はなはた上氣　口
唐韻の詞からかひ何事そ　翁
衣きぬ山はと持てまいつた　恕

ゐりを見ぬ若衆いつくにいつの秋　口
江戸よりのぼる戀風の露　恕
花の色通り手形にのせらるゝ　翁
水ぬるんたる池の坊也　口
有馬山湯口に春や立ぬらん　恕
あかれや〳〵峯の雨雲　翁
石神も通力おはしますならは　口
今奉る大根の事　恕
新そはは公卿疝氣の藥とて　翁
月に石臼例を引たり　口
わるうても藝に付ぬる知行の秋　恕
子〻孫〻の山猿の聲　翁
丹波路を罷出ると諷ふたり　口
いかなる鬼もいはふ君か代　恕
ふんとしもゆつたりとする時津風　翁
尻をからけて前わたりゑ　口

哀れけに戀する人の灸を見よ　恕
その俤も中段にして　翁
跡につくもかまはぬやりか構なり　口
既に着到御馬はりに　恕
普請場は鎌倉やうにて候歟　翁
石切鶴か岡の松風　口
南無八幡華も双もこほれけり　恕
ころふ所に驚のこゑ　翁
大うすはとこに殘らん朝霞　口
靜謐の春立る制札　執筆

攝州大坂西山氏宗因　梅翁
同所片岡氏宗岑　旨恕
山城國伏見住　三十三句
三十三句

任口
執筆

三十三句
一句

何馬

やあや拜堂嶋とをせ月の弓　旨恕
天滿におゐて鳴鹿の介　貞因
植木屋の下葉は萩の咲にけり　西鶴
葭簀何枚風の吹しく　昌本
水鱧をつらぬきとめぬ夕日影　因
一番燈あらふ磯なみ　恕
すゝみ出て遠方よりの舟遊ひ　本
國ては銀かうめく松原　鶴
かくし横目あれ見よ鷺も顯れたり　恕

起請にのする別して住吉　因
流れの身當座はかりて忘れ水　鶴
かきつはたとは小むらさき樣　本
帽子してはる〳〵ぬる旅芝ゐ　因
請合食もさめぬ風氣の　恕
ゑへん〳〵せきの鷄取てしめ　本
すきな契やわかれはに又　鶴
頰かすいて泪にくもるます鏡　恕
秋ひたるいは我は是たそ　因
學寮や心の月はふたつなし　鶴
あかり窓より霧そ晴行　本
花の山乘物を爰にとゝめ置　因
春めつらしき小人しや〳〵　恕
蓬萊をかさり詞の嶋めくり　本
いらぬ波まてむすふ付合　鶴
拾ふては緒しめにすなる玉柏　恕

難波男の足はちか〳〵　因
煙絶す民の竈は居喰にて　鶴
獅子のいきほひ山下風ふく　本
初瀬川波もてんつる〳〵と　因
しやんこ〳〵やふれる五月雨　恕
はした錢光みたれて飛螢　本
惣して所帶をまかす稻妻　鶴
三日月の子持と成てそれよりは　恕
脇ふさいたる衣かりかね　因
目算をする濱荻の里見えて　鶴
あそひ屋殿は大淀の松　本
こそけてはかみさひわたるあたまつき　因
摺身をつけるかたそきの板　恕
打疵の岩戸をすこしひらかせて　本
人の面は大事の物しやに　鶴
作代はまた案しても御覽せよ　恕

千枚まては高砂の松　因
さいく張いなみのかけて泥を引　鶴
鉢一はいに清水なかるゝ　本
素麺をいて其時に西行は　因
する〳〵と極樂の秋　恕
常〳〵に埒明てをく胸の月　本
年中たく程木〻のうら枯　鶴
とめ伽羅や嵐の花に匂ふらん　恕
大夫は揚屋に鳥は古巣に　因
方丈の灯は春の夜見世にて　鶴
たゝはよう居た賀茂の片脇　本
流くる此矢すなはちめつた的　因
扨も義貞はりぬきになる　恕
捨ぬ世や昔を殘す判盡し　本
飛脚にわたす三井寺のかね　鶴
さゝ浪やしかの都の御用箱　恕

彼黒主か物やおちたる　因
鼠取ひゝく夕の哥枕　鶴
第一富士の煙出しから　本
むさしのゝ草のゆかりは跡かいて　因
葛藤はかま兩筆の物　恕
取かはす誓詞きかすな轡虫　本
月さへうらむ不破のせきおれ　鶴
又けふも野上の里へかよふ氣しや　恕
鶯鳴つ目の養生に　因
着ねはならぬ笠にぬふてふこほれ梅　鶴
仏のわかれまた忌の中　本
寐所や二千余年を隔らん　因
いま日のもとのわさくれかある　恕
恥しらす人の見ぬとて外の濱　本
折ふしはとれ銅の爪　鶴
晴てゆく時雨の跡の早草鞋　恕

あらそひかねて火もとはしれぬ　因
人魂や遠の里人なけく覽　鶴
一度は花も蘆の世間　本
文庫の文も反古におほろ月　因
さつてのけられ別行鴈　恕
見にくいは帶したなりの越路にて　本
いかう大儀にうむ荒乳山　鶴
立願は上をはしめて下もみち　恕
敵はのこらすおつる白露　因
常は髮あかすの門も秋の霜　鶴
春日の勅使月の草むら　本
きり〳〵す太刀長刀に三笠山　因
闕所のあとは野原也けり　恕
早縄をむすへは柴の庵にて　本
さとりの道にまよふ雪杳　鶴
煩悩の雲かさなれる木曾の山　恕

檜の木材木われてあふ中　因
大仏師つくり文なとかよはせて　鶴
ひしゆかつんまを詠入候　本
時鳥鳴つる方は忉利天　因
賽はひとつにあかる村雨　恕
船につむ松の梢の中つもり　本
欲にか、つたわかの浦波　鶴
持あます玉津嶋姫よひ入て　恕
手の内やらうなりひらの舞　因
大共大正月の事は花の春　鶴
福と云字を帳とちの宿　本

旨恕　廿五句
大坂藤原氏
貞因　廿五句
同所井原氏

西鶴　廿五句
同所藤岡氏
昌本　廿五句

何佛

花鳥や三つみ、つく物笑　保友
見さいな〳〵櫻さく山　旨恕
春の野に扨も今日御供して　梅翁
餘座にもか、る霞たな引　友
行厂は尻こそはうて何とやら　恕
打またけたるもち月の駒　翁
秋風の大音あけて名のる也　友
舞臺遙に松の葉の露　恕

編笠にとうと靜まれ一時雨　翁
寸紙子あはれよしあるかはて　友
世間はとかく死なれぬ命にて　恕
力おとしの跡のひとりね　翁
不食して猶うらめしき戀やせに　友
物おもふ比は胸かつかゆる　恕
こぬ人を待夕くれの入湯桶　翁
旅のやとりも錢かねの聲　友
難波津を自由にまはる月みえて　恕
初汐時をしるやからくり　翁
そこて太鼓露の白波打ちらし　友
軍のはたらき嵐はけしき　恕
立さはく末一段の嶺の雲　翁
仕手かかけたるかつらきの山　友
短尺の句からものひし青柳に　翁
鶯とんて管絃のこゑ　恕

梟の鬼にも戀をするとかや　友
津にむせなから誓文〳〵　翁
若衆に命は露もおしまぬそ　恕
指もさゝせしさす月の影　友
酒のかんあたゝめすとも先一つ　翁
遠路のつかひ骨折〳〵　恕
おめてたいか早う聞えし爰かしこ　友
廿日ころより餅つきの音　翁
大坂や天滿の祭それ〳〵に　恕
ことしは町もくつろきにけり　友
會所屋に二間庇を付られて　翁
塩やく濱の萬勸定　恕
こかすまに又も手代や望む覽　友
とふ人あらは五六人扶持　翁
似合敷緣の道ならまつすくに　恕
縄規をあてゝ立うかれつゝ　友

障子紙隙もとめても風ならは　翁
上々吉よならす爪琴　恕
ふしなしと書付をして嶺の松　友
水戸の住とてしれぬ小謠　翁
關所通れ〳〵の物もらひ　恕
おそれをなして虱こぼるゝ　友
花の波かゝる貴人の長船路　翁
御水桶に春の夜の月　恕
東風ふかは茶道か手にも渡るへし　友
又かまくらへ墨跡一ふく　翁
初祖大師訴詔の事の候て　恕
桓武天皇御前ちかう　友
みめよしの拾九代の後胤なり　翁
惡逆無道の戀みたれ髪　恕
きぬ〳〵に人を切てや過ぬらん　友
袖と〳〵のいきすりのかは　翁

國番をつきつけ賣にあはせたは　友
或は人參かた見せの先　翁
一かせきおちふるゝ氣を引立て　恕
何といふても江戸は廣いそ　翁
六法もおほい事にておはすれは　友
つかかしらさへはけた年はい　翁
分別も家中まろめて空の月　恕
下知していはく秋風の拜　友
大相撲つよきに闘をふせかせよ　翁
當麻の村中水の白波　恕
諸芽の光もさしして飛螢　友
笛竹のはのそよや音樂　翁
霰ふる時にふしきの雲みえて　恕
めんほく灰にまほす占ひ　友
待霄のうせ物さかせは猫のふん　翁
根付巾着かねひゝく也　恕

高砂の尾上の松千代出立て　友
清書しまふた後の手拍子　翁
古寺の池の鯉鮒浪にうかひ　恕
南大門の明わたる空　友
月は山花は錦の能衣裳　恕
雪はのこりて白き鬢髭　翁
耳もよく目もよく霞む事はなし　友
あした夕によみ書の道　恕
算用に食くふ隙もあらは社　翁
町儀に付てうき世なるらし　友
奉行所にけふと暮してあすも又　恕
今年も今は皆濟の空　翁
懸帳をけすかことくに失にけり　友
伊勢講中を神そ守ら舞　恕
何村の何〳〵幾人出船に　翁
公儀普請のかゝる浦波　友

沖津風ならひに土俵一さはき　恕
膝か流れたあしたつの聲　翁
仙人の飛損ひし月の空　友
手のあらう所黒石の露　恕
盆山は不審も霧も晴かたし　翁
今朝の御客はとうして遅い　友
挨拶はとなりかうなり五文字に　恕
旅の心をよむ九十馬　翁
打つれて和田の一門何かたへ　友
此楠は嫌はせらるゝか　恕
花の前植物いかゝと有しかは　翁
御庭造りあら玉の春　筆

執

三十三句

攝州大坂任梶尾氏（マヽ）
保　友
同所片岡氏

旨恕　三十三句

同所西山氏
梅翁　一句
執筆

何髭

月に詩を天神橋も作る也　次末
一榮一樂秋の夜の友　旨恕
大上戸夢の枕に鴈鳴て　以仙
荻ふく風は茶のまうの聲　梅翁
あの人はをいてわせたる夕間暮　恕
扇と露とそれ取にやれや　末
雨晴てやかて都をたち宿に　翁

駕籠はあれとも雲に乗つゝ　仙
神鳴も君を思へは落かぬる　末
梅壺梨壺さはく戀風　恕
春なれや大内山の大かふき　仙
おほん評判うくひすの聲　翁
野邊近く兩陣互に入亂れ　恕
追手八專搦手土用　末
宇治勢田の炙はしをもひかれたり　翁
箒の先に螢とひたつ　仙
尉の姥雲の上迄いぬへくは　末
古い咄を庭のしら菊　恕
露霜にいつ朽はてしくさり鯛　仙
錦の店に錦木の月　翁
花に行女は内につれ〳〵と　恕
ともえ山ふき藤の黄昏　末
ひたり右へくる〳〵霞む池の水　翁

小船は波に馬は曲乗　仙
此間源平兩家大隙て　末
あひ引にひく茶うす成らし　恕
粉藥を是から木やりてやる程に　仙
扨おきやるかあなたの產後　翁
曖に二人か中も此うへは　恕
いよ〳〵兄分夜は明にけり　末
御小性衆旅立空に立出る　翁
らしやの羽織の浦山の雲　仙
船頭殿申へき事通吏有　末
人買の手にわたる狀箱　恕
口上もたんたよはりに夜半の月　仙
まつた〻中にこはる虫の音　翁
石燒てあてられにけり秋の風　恕
白土をぬる袂涼しき　末
足代の下は川波かけ作り　翁

法花經以前のこり木町筋　仙
車牛向てまうさくやゝしはし　末
こつをたゝいてはらふ人込　恕
せつかいに大長刀を取揃へ　仙
强盜或はすり鉢の底　翁
川太郎源三の水をくらはせう　恕
東岸西岸みそはきの露　末
送火もたゝをのつかから月は入　翁
飛脚一人ゆく鹿の聲　仙
江戸の花に山を見す共云事あり　末
芝ゐの初日霞たなひく　恕
いつれもの御望次第鳴雲雀　仙
野邊のわか草青串の竹　翁
先幣をふりさけみれは春日山　恕
萬葉時代のそれ大矢數　末
我手柄扨かたかなに申へし　翁

むすこうんたる人のましなひ　仙
天よりも一つの小刀ふり下り　末
星の光をのする菓子盆　恕
めくりくる其文月の連哥の日　仙
長生殿の植物の色　翁
地にあらは戀慕れゝつのつゆ泪　恕
なんそや一時くねるお内儀　末
思ひ佗枕によつて貫之も　翁
其脉体の糸による物　仙
此上は外へもみせよ羽二重を　末
加賀より幾卷点かつかへた　恕
痃癖や雲もおこりてこしの山　仙
按摩もなつるいはほならなん　翁
二の舞のはては鬼神か顯れたり　恕
此番組は修羅かあらぬか　末
御家中の本綱中つなしめて見よ　翁

碇打こむ波の闕船　仙
針先の海にしつませ給ひけり　末
斗圭にむかふ虫明の迫門　恕
岡山もとつとあなたの花敷て　仙
かけにまいらぬ松のこち風　翁
振舞は何時成ともおほろ月　恕
中なをりして歸る厂かね　末
され事しや三行半の玉章は　翁
恨積れはこそくられても　仙
脇あけの袖ふり切てしや爰な　末
なまこゝろある若衆也けり　恕
小哥にも後生願へと諷れた　仙
雪てはあらてのふ其白髪　翁
浦千鳥足はよろ〳〵目はみえす　恕
殊更御酒か過る濱風　末
夕くれは脇差其外捨小船　翁

難波わたりの俄道心　仙
引おひのかねやそなたにひゝく覽　末
二三分はかり殘る月影　恕
蔦かつら懸りさうなる釘の先　仙
菅笠はらふ宇津の谷の露　翁
東路の亡者是まて御太儀に　恕
西方のあるしそこて挨拶　末
地藏舞日とつよからふ花の陰　翁
柳乱れてのこる錢米　仙
さらは〳〵問屋拂の朝かすみ　末
切手を取て漕きゆる舟　恕
請にたつ蜑のしはさも何か拠　仙
我〳〵もとよりならふ笘ふき　翁

因幡國鳥取粉川氏
次末　廿五句

旨恕　廿五句
攝州大坂高瀧氏
以仙　廿五句
梅翁　廿五句

何桶

お詞の外は有ましし京の花　旨恕
いや〳〵こはロ鳥の囀　次末
曖も破るゝ雲に春暮て　梅翁
公儀へあかるむら雨の空　如見
辻〳〵の人〳〵散し候そや　末
火の手計に煙消ゆく　恕
されはこそ一陣乱て殘る月　見

翁　二段目高う天津厂かね

怨　萩の錦肩からよいのを見しやらいて

末　今度實盛是〳〵の首尾

翁　折紙は思ふたよりも猶以

見　年にもたらて器用な事の

末　いや申衆道の末の夕間暮

怨　こそたゝならね付さしならは

見　戀すてふわか巾着の底明て

翁　手形は是に夜はの通路

怨　ころひにても御座なく候龍田山

末　神代もきかぬ泥たらけ也

翁　かけまくも忝しや大鯱

見　かうへを地につけ居たる白鷺

末　清經はかへつて迷惑暮の月

怨　句前〳〵をくる秋の風

見　鹿は早先に出ました山よりも

翁　御覽しけるか冨士の野はつれ

怨　茶屋のかゝ雪いと白う降たるを

末　何そや草履てけさの別路

翁　乘物はさすかよ所目の多けれは

見　桐油をかけてつゝむ玉章

末　早飛脚小町かもとへかよふよのふ

怨　出羽にてわたすかはせ金之

見　大夫本縱たふるゝ事有共

翁　此新九郎命かきりは

怨　北條の末にはあはむとそ思ふ

末　かまくら山又戀の山また

翁　袖と袖行衛もしらす成にけり

見　扨も品玉月はかりこそ

末　やんや〳〵ほめてとをした露時雨

怨　今ははせを葉に諷たはふれ

見　古寺も乱酒に及ふ時しあれは

年忌なりとて和田の一門　翁
勝手迄楠御見廻なされたり　恕
大きな念比八尺まはり　末
ふんとしもねちきる泪さりとては　翁
りんきつのつて虎の革也　見
對馬より三行半を渡さるゝ　末
祭は月に哥はかくなん　恕
時鳥神慮をすゝしめ給ふ事　見
團扇ならひに杉の村立　翁
花に幕先兒玉堂太良坊　末
なのる中にも愛宕の春風　見
すゝみ出て白山雪と消はてん　恕
そなたの儀なら胡蝶飛行　末
此上は思ひの火にも灰猫の　翁
化物さたの跡のひとりね　恕
わるひのをよいと覺えて忍ひしか　見

おしやれは分別袖の白露　翁
よの中をへちまの皮と問し時　末
かる石ひとつ隱家の秋　見
八重霧の山の奥にも妙藥有　恕
十五日めによくなをる月　末
初嫁子尻やけ猿といはれしも　翁
其戀衣見事縫れた　恕
執心やはな紙袋に殘るらん　見
かた髪そられて出し幽靈　翁
今もあの橋詰ゆけはそつとする　末
下は川波上は大夜着　見
床は涙女郎はなしてゐる内も　恕
俗よはつてうつけ惡ふもちすり　末
出家道乱心かもとよりか　翁
何領酒戒れろ〳〵れろ〳〵　恕
手なきものかたはものとそ聞えける　見

したゝかなめにより棒の後　翁
鼠戸のむくひかちうのね上えぬは　〃　末
善知鳥はかへつて提重の露　見
爰に氈秋の景氣のそとの濱　恕
あかい月夜にしく物はなし　末
申さう〳〵さらは申さう花の陰　翁
御取次の袖の梅か香　恕
先春は東門跡へ心さし　見
此たひ日光霞立ゆく　翁
既にはや上意の通雲のほり　末
あまの羽衣舞ませいとて　見
何にてもめてたい所を三穂の松　恕
ちよはするかの竹さいく也　末
判官の召つかはれし小刀にて　翁
比は文治の腕香にこそ　恕
一錢二錢御信心あるかた〳〵は　見

伊勢の神垣すいのふの内　翁
とをし馬の尾迄を誰か思はんや　末
供まはりともいはぬ旅籠屋　見
はつはとて腰をかゝむる庭の月　恕
葛かつらまて痂氣筋かや　末
きり〳〵すまつ爰もとてをさへたり　翁
見れはまおとこ黄昏の空　恕
俤はいひ懸次第のかねの拜　見
其夜の夢をたもらはもらはう　翁
去なから無理てはとをらぬ戀の道　末
いとしいあまりに恨もふしも　恕
身の皮も此お子ゆへに花も皆　見
ちりけ三つ四つ鷲の拜　翁

旨恕

因州鳥取任粉川氏

廿五句

次末　廿五句
梅翁　廿五句
樋口氏　廿五句
如見

何鯉

妊句や月をかくして懐に　胤久
霧に隔てぬ小硯の海　旨恕
天津鴈旅乗物に聲立て　友雪
日はちり〳〵の野への遠方　宗先
夏山の後に汗をかゝれたり　恕
蟬の時雨もとをる皮切　久
番付に森のことの葉大皺　先

重引出しの次は松風　雪
藥袋やふれて夢は覺にけり　久
夜半に捨子かきやあ〳〵の聲　恕
せゝり鷺其日暮しの事なれは　雪
沢のなかれや汲肩のうへ　先
何も皆天道次第と作る田に　恕
人間万事牛はうしつれ　久
極樂へ參る者あり地獄へも　先
四条の厨子に近き寺町　雪
洛中にかくれこさらぬ此本尊　久
身かはりにたつ秋風の音　恕
伽女郎今宵の月にさはりなし　雪
枕のうへの露のぬれ哥　先
花衣かたしく所を水あひせ　恕
おこりはおちて跡の春風　久
立つゝく霞は消てこはい顔　先

しかりと越しのあまのかく山　雪
氣にあはぬ十市の里の不性者　久
萩の下葉も蛛の巣たらけ　恕
より金て鹿のねなからうつしてん　雪
御所水引や月の入かた　先
前髪もみたれてかゝる峯風　恕
付さしもつて行末の空　久
腕先に力ためしの雨の暮　先
笑ひて左右へたつ郭公　雪
道外ては舞臺もさはく音羽山　久
瀧津川邊を尻からけして　恕
岩根松ねいる所を後から　雪
苔のたもとやひねる痃癖　先
奥山に住はてぬへき座頭の坊　恕
世のうき時は一段語らう　久
よそ目のみ忍ふにあまる講尺日　先

なみたの文や朱筆淬けん　雪
雪舟のなかれの身とて口惜や　久
荒木氏とは知人もなし　恕
當分に先百俵つかはされ　雪
器量骨柄相模にならふ　先
其高をやつと見上る空の月　恕
三十丈の露の白玉　久
山城の備をたつる霧隠れ　先
ひよとり越やわたる聲〳〵　雪
武庫の浦ぬき手をきつて花の波　久
霞のひまのおもも桁取かち　恕
春の風たんたら筋の腰替　雪
しからき焼の雪の村消　先
神鳴の爪かた殘す山かくれ　恕
扨こそ黒雲かゝる点取　久
一包はつきりとして目の薬　先

御用荷物や分る青草　雪
長崎より今此野へを通らるゝ　久
傾城の風都なりけり　恕
生れつき色白にしてひらしやらと　雪
とまりしやないか夕臾の宿　先
あれはてゝ軒は寂しき芝ゐ事　恕
けうとき秋にわたつた獸　久
野分吹麝香鼠の匂ひきて　先
月又おかし張かねの網　雪
酒ひとつ肴あふりと成にけり　久
豆腐はかりは大江山にも　恕
貧僧て暮しなからも生野迄　雪
もらひためたる夏引の糸　先
五月雨にいつれもよつて博奕わさ　恕
さらは奢てともせ螢火　久
分てとる蓬か杣も中間事　先

のそむあら田も今は本田　雪
親祖父百性と成て年久し　久
召出されて名乗月かけ　恕
既に秋三番打の闘所　雪
露もみたれてかゝる懸の碁　久
花の紐とけは則帶も又　先
柳はみとり扨は床入　雪
鶯の拝にやはらく大口舌　恕
互にこと春閑也　先
年頭の目禮してや通るらん　久
登城みな〳〵明方の空　恕
鳴烏そろへ羽織の色添て　先
躍はありや〳〵うかれ心か　久
つゝけ買昨日の秋と各別に　雪
女房のおもはく月に村雲　先
世の中は夜半八つ迄咄されす　恕

道こそかはれ辻切追はき　雪
まよはかす師走のはての畫狐　先
行者の祈り足を空にて　恕
鉄輪の火うはなり打の御振廻　久
戀にすりこき野ては出茶湯　雪
宿はいり名物錄にのせられて　先
先付合を月次の會　久
伊勢講を花に結ひて馬からう　雪
かけ分かねやかすむ入あひ　先
春の日やせつはは丶きにみかゝるゝ　恕
氷は消てかた炭のをれ　雪
氣晴ては風のとかむる際目論　久
町中立合き丶し伽羅の香　恕

大坂　廿五句

嵐久

同　旨恕
同　友雪
同　宗先
同
同
同

何鮫

花の親仁然るに一子そ若盛　如見
ゆつるは讓るか此家櫻　幸方
囀れる三鳥他言なかれとて　旨恕
半金色の春の夕くれ　空翠
縫紋に立ぬる雲や見せぬらん　方

嵐のをとの高役者なり　見
下り月今度京より小夜更て　翠
みやけの鈴虫松虫そ鳴　恕
留守中は隣あはせの萩薄　見
煎し茶わかす秋は淋しき　方
冷めしの其色としもなかりけり　恕
上に思ひを見せぬ封しめ　翠
五大力うかりし戀の哀しれ　方
そもしとならは住吉の隅　見
執心は雀と成て飛う共　翠
扨も實方哥道におゐては　恕
去なから業平といふ人は又　見
とうやらすれは一手舞れた　方
横笛をまつかうかまへて取あへす　恕
むかふ齒そつて出來合料理　翠
けふの客此前怪我をした時に　方

されは揚屋の二階より月　見
目薬を付さしにする中の秋　翠
涙の露も入のこしなり　恕
三分一跡に思ひのまたあれは　見
とうとられうもしれぬ御年貢　方
國代のかはりはかはらせ給へ共　恕
きのふの淵や藤戸の渡し　翠
浦の男云懸次第腰の錢　方
かやうの肴はとこて召ても　見
空の雲時ならすんは心せよ　翠
布施を上たる山ほとゝきす　恕
一七日杉の村立はや暮て　見
別鍋をすへゐる宿の月　方
肩入て後の出かはりからも猶　恕
御意にまいつた乘物の露　翠
秋の風二三ふくにて早覺て　方

13335

ねふたい時は葉たばこの色　見
長談儀それ世間は燧箱　翠
あるかなきかの番太郎めか　恕
かふりぬる木綿頭巾のうすみつちや　見
祝言してからとかふいやるな　方
其情大かはらけてまひとつは　恕
橋越てこさる別路の末　翠
無用心な肌に付たるかねの聲　方
自然の時の更る夜の秋　見
月下の門たゝき起さは醫師殿　翠
扨學寮にしきる霧雨　恕
今爰に一食をして峯の花　方
骨と皮との烏歸る空　見
引灸の煙も霞む曙に　恕
指程にしてなひく呉竹　翠
差のそく窓の障子の穴よりも　見

あれあの舟に又ふり袖か　方
祭なり存た大夫天神の　翠
末社と現し給ふ哥舞妓子　恕
注連繩もたかひに引し股腕　方
心かはらて一五三まて　見
味方にはお賽ほそかれ〳〵と　恕
喬麥切所しやなて切所しや　翠
杣入て木曾の山路を行嵐　見
雲の棧落札になる　方
富はこつち月は出るに澄のほり　恕
長生殿の前栽の露　翠
菊の酒何かあらうそ樂も　方
秋より外に一瓢の風　見
蕚かしかましとて投捨て　翠
或はさゝ波諷ふ江戸ふし　恕
男達手志賀の浦舟是てこそ　見

あふら墨ぬる白髭の宮　方
瑞籬にしふきあたりか強うして　恕
かひのはへたる松の村立　翠
我見ても久しく成し餅のかけ　方
月の鼠や先例をひく　見
去程に花火といつは論語にも　翠
時代かはつて矢さけひ冷し　恕
大力東山殿以來なり　見
よりの分ては又あらう共　方
高〳〵も知れた通りの奉加銀　恕
讀上らるゝ富士は物かは　翠
田子の浦匂ひの御句や出ぬらん　翠
是から枕にかゝる藤浪　方
涅槃像共に涙を郭公　見
先住よりの軒の春雨　翠
朱印地の謂を殘す彌生山　恕
君〳〵たれはぬるむ水帳　見

煙たつ竈にきはふ風呂入に　方
鍔をはしめて町中をの〳〵　恕
うき名をも云つのつての訴詔事　翠
一たひおうへになをる約束　方
不便かる十四五よりの袖の月　見
そはから見られぬ前髪の露　翠
定舞臺向ふか高い初艶　恕
飛んて落ては鳴鹿の聲　見
引籠る御身かろけに山の奥　方
ゆらりと法の道に入らるゝ　恕
年の藥鬼をあさむく心さへ　翠
くとけは其まゝ誰いはね共　方
戀も皆襟に付ての花衣　見
猶梅か香をとむるひろうと　恕
　　翠

摂州大坂樋口氏　如見　廿五句
同所安平次氏　幸方　廿五句
同所片岡氏　旨恕　廿五句
同所北氏　空翠　廿五句

箔何

大盡やたとへは月のある夜椀　重直
秋のねさめは二三人前　幾音
稽古矢の向ふの山に鹿鳴て　益友

されは百日時雨ゆく空　旨恕
私の家に此以後横目役　音
餘多か中のおも手代して　直
友船の出入さし引銀さはき　恕
革甲一枚しき浪の音　友
風むかふ海はるかなる硯箱　直
幾重の雲のあとの跡付　音
吸物の鳥も聲する山隠れ　友
お使者是へと通す柴の戸　恕
委は手紙に残す墨の袖　音
日比のなしみも夢の世間　直
前髪をこつそりとして面かはり　恕
もはや其方女房よひ時　友
よい比にたはけつくすも程かある　直
酒とれ〳〵露そ更ゆく　音
遠道をかゝへて月の空詠　友

高き駕籠をも厂渡る聲　怨
花の春秋は其身のふとりしゝ　音
いかさま力は雪の松かえ　直
頼よる談合柱に竹の垣　怨
あまの磯屋も作り狂言　友
燒塩はお國かむねの思ひより　直
浪にしほるゝ殿の懸腹　音
草衣末は知へき知行寺　友
東叡山もたゝ石の床　怨
さひ刀悪魔を拂ふのみならす　音
追付ふたつ輪くゝる狗犬　直
松笠を作り入たる宮所　怨
初茸一種てさゝうたふ聲　友
茶を給て跡は霜夜の更る共　直
みしかい咄ありあけの月　音
秋を吹風のやとりは途中にて　友

門立時分日くらしのなく　怨
下待しはすはに波や越ぬらん　音
一客人はよそのうらふね　直
難波潟芦屋釜迄懸られたり　怨
扨ふくへにはすみよしの里　友
散うせぬ御法の花もたはい種　直
去年の寒油常の灯　音
外科箱や文をひらけは春見えて　友
公儀の撿使窓の明ほの　怨
罷出る杉の庵の五人組　音
身を捨衣過書の飛乗　直
神輿かく袖に浪たつ天満河　怨
なけても錢は水底の月　友
白菊の露さへかろき秤目に　直
伽羅を分たる秋の初霜　音
すき立て我もと結やけつるらん　音

大夫樂屋に待ならひけり　怨
思ひには辨當茶湯たきらせて　友
朝餅紙もしきしのふ中　直
坊主扇是をかたみに殘し置　怨
高座にのほり給ふ都路　音
貢調物絶す備ふる芋頭　直
醬油初汐からくにの舟　友
くたり腹ふりさけ見れは月出て　音
子もりする身や枕かる山　怨
あたロに聲打かはす松の風　友
曲三味線やしらへ初けん　直
そんもそも此錫杖を振立て　怨
法のちからを顯はすうせ物　音
靜なる室の戸住の煤はきに　直
切にやつたるをのゝ篠原　友
露霜に置かへて見ん手水鉢　音

にしりあかりに入方の月　怨
蕃悪筆なれと今ははや　友
蓬か杣も俄分限者　直
問よれは庭の面は不物數奇　怨
献立にさへのらぬ魚かけ　音
御祭名はかりわたす春日山　直
簡略まもる家〳〵の風　友
朝夕に絶〻上る煙出し　音
涎藥とみれはこそあれ　怨
眞柴とる祖父かふくり花のみね　友
尿瓶の流かすむ谷水　直
囀れる鳥の音近き能棧數　怨
によつと日の出の空靜也　友
はやり女郎行かふ雲の袖はえて　直
誰さま彼さましはしとゝめん　音
此度は隙入おほき廻狀　友

面八句ものこることのは　怨
すり鉢の音より先に御酒一つ　音
あらふ碁石の數の年の賀　直
池浪に影を移せる星仏　怨
目の内きよく螢とふ暮　友
若竹の末頼ある器量にて　直
さなへとるなら千石までは　音
雨天に大商人のおもふやう　友
あそんてゐても長崎の月　直
丸山の色に中〳〵ふけはせぬ　怨
妻帯なれと一派立秋　友
雑行も露ふり捨てもろ〳〵の　音
才智なけれはまして望も　怨
悴か事只御めんとう計なり　直
扨又出羽は小國なから　友
秋田米材木あれは花もあり　怨

柳はみとり藏はかし端　音

大坂　重直　廿五句
同　幾音　同
同　益友　同
同　旨恕　同

梅何

花に酒のむ所也みよしのんの　宗恭

濃茶にぬるむ水分の山　春良
元日の朝は霞の瀧津瀬に　旨恕
御出のよしを驚の拜　吉眞
公儀ふりけぬか上にも雪の道　良
土氣のはなれし松の下枝　恭
長芋の色はさなからみねの月　眞
一息ふかれてたゝ秋の風　恕
印肉に同しゆかりの鹿の聲　恭
時雨の露をのこす書置　良
散木葉先おもしろき哥の分　恕
太皷女良にかよふ夜嵐　眞
御心中とてもかはらぬ上からは　良
口をそへたとなんの盃　恭
曖はと共かうともきかれまい　眞
乘かゝりぬるけふの城責　恕
すゑ一段かふりをふつて語らるゝ　恭

手打あはゝにこかくれの松　恕良
是やろか〳〵とてほとゝきす　眞
本膳出すあとの村雨　良
お成門あけはなれては月もなし　恭
置擧にして花の白菊　眞
露霜の結へは同し厚鬢に　恕
脇かゝりにや鳴虫のこゑ　恭
むさし野を三幅對に書分て　良
あはうくらへは常よりも猶　恕
紋日には思ひこかれて立煙　眞
遠近人は口舌のみして　良
行道も是醉狂の至也　恭
終のねかひは西近江へそ　眞
湖の波分衣一枚に　恕
棚とをしたるあまの釣舟　恭
もし本草誰跡とめて狀挾

鎌倉たつていそくく芦の屋　良
旅枕月のゆくゑは六はらに　恕
寺地と成し野邊の夕露　眞
御朱印の色はかはらぬ松一木　良
牛玉の札にまもる君か代　恭
住は只民やすけなる門柱　眞
新里かけて馬とゝめあり　恕
綿つむく車やとりは是やらん　恭
身のすきはひも大津海道　良
逢人にこるとはなしの柴や町　恕
かさねふとんやかはす手枕　眞
戀病にかゝる命も何か拠　良
露をあはれふやせ猫のつら　恭
月のあした煙ともしき釜の下　眞
昔の秋をおもふまゝことの　恕
あかし猶後紐より花紅葉　良

嵐の山や彌左衛門腰　恭
大井川關口流にとつたりな　恕
杳わたしする芦鴨のこゑ　眞
降雪のたてぬきいかにわる木綿　恭
枯野の末に酒袋ほす　良
村松の煙をのこす熟地黄　眞
のそきの箱にかよふ浦風　恕
名によせて立さはきたる波の平　良
このしろやうの網子のよひ聲　恭
篝火の光きよめて富士詣　恕
棒一本に更る夜の道　眞
さや鮫にみかゝれ出る空の月　恭
雲霧はらふお簾本風　良
飛鴈も先陣後陣乱れ合　眞
石をとつては濱の眞砂地　恕
川波もはね題目の聲添て　良

かはつた錢をのこす舟賃　恭
今日より見世物にする魚荷之　恕
かふろあかりは京からすなはち　眞
手習はおもひまいらせゑひもせす　恭
白雲帶に鎗はからつく　良
青苔の色をそのまゝ二帖釣　眞
唐人の寐た跡そふり行　恕
長崎の出嶋は雪の曙に　良
足かたみする繪踏之けり　恭
鞠袴散しく花に埋れて　恕
消る霞をたゝむ風呂敷　眞
少年の春のはしめの樂屋入　恭
太子以來は此寺の月　良
秋は猶茶つみ水汲夜念仏を　眞
すいきのなみた手の内の露　恕
道行の其一ふしは我ものに　良

にくいやつめかをそい小便　恭
忍てもない國許よりの金拂　恕
江戸隱居には問くるもなし　眞
莚しき女手形も古されて　恭
半季は夢と過るひとりね　良
はせを葉の風吹おろす灸のてん　眞
二三度ふるうて袖の秋雨　恕
露ちらす是有たけの隱し藝　良
飼入られた山猿の月　恭
昨日けふよい親方を持ぬれは　恕
雲の立まふむらさき帽子　眞
尻つきをしはしとゝめよ天津風　恭
手くせのわるい其戀の山　良
付合に枕の蘆を又しても　恕
へたつる中やかへすうら壁　眞
兩隣すこしの事もいひ分に　良

目をむき出して物見棧敷　恭
花に風波の皷のはしらかし　眞
ほうひよらあころ鳥の囀　恕

大坂住井上氏　宗恭　廿五句
同　濱田氏　春良　廿五句
旨恕　廿五句
同　赤澤氏　吉眞　廿五句

何拂

旨恕

月見れは秋思四吟にとゝめたり　次末
桔梗かるかや煎茶に酒　梅翁
虫の聲つくそとまゝの宿取て　定俊
廿五六のすゑのしら露　末
よいしこみをくれ先たつ大矢數　恕
扨まさかりに樫も雑木も　俊
細工小屋せなかの上に作られて　翁
骨違にやおつる入札　恕
一の湯にさあ〳〵さあ〳〵早いかよい　末
ふんとしひゝり夕暮の雲　翁
櫓手を打上みれは山のはに　俊
三本からかさ雪はふりつゝ　末
云合せ草履取共若菜つむ　恕
大夫もとの子や出る春のゝ　俊
付さしの底に蛙や鳴ぬらん　翁
ちりてれてんに鶯のこゑ

花そちる吉野の山はやあ是の　怨
忠信ひかへておとす瀧水　翁
爰に又むさしか好む所てん　翁
お城の上にかゝるからし酢　俊
神鳴を寸白かとて空の月　末
終には探幽筆つむし鳴　怨
村薄畜生道に入みたれ　俊
野軍破れて皮をはかるゝ　翁
ひろひ首いか様是はと思ふ也　怨
土けんさいの御中にこそ　末
糖おこし今は何をかつゝむべき　翁
當社におゐていのるはな紙　俊
かたみとて山王猿屋か楊枝あり　末
あいこの若のなてし髪先　怨
說經の跡から風も吹送り　俊
其船しはらく大津松本　翁

かう見やれ右手は八崎山田村　末
あらおもしろの四つ物なりや　翁
仰られ分御家風なら月影も　俊
佑筆かきく小男鹿の拜　怨
秋は猶山のおくにも殿かある　末
つようなひかぬ彼たつた姫　怨
執心は石の鳥居と成にけり　俊
既に衆道を請取にして　翁
ぬきあひし大小いつれも此方へ　怨
かんりう嶋の名やなかるらん　末
沖津船すくに配所と有しかは　翁
三人なから食もくはすに　俊
法師武者只戀病にふら〳〵と　末
比叡坂本の夜あるきの月　怨
志賀の山盜出せる露の玉　俊
のほりさゝせて渡す厂かね　翁

あすか日も五十人組花そ咲　末
歩役にかゝる春前の雨　恕
其積り百石について殘る雪　翁
船一艘に雉子鳴なり　俊
人柱何能登守教經とや　恕
元暦元年頓證菩提　末
石塔を上から下へさら〳〵と　俊
高野山より出るとろゝ汁　翁
太閤は胡升の粉迄引具して　末
口をつめたる金の瓢箪　恕
山雀のなけ共聲の出はこそ　翁
はらやこほるゝ露の夕暮　俊
みつちやつら只我からの秋の風　恕
律にもひゝけ拾貫目なら　末
表口三間はりの空の月　俊
近代加様に成し町なみ　翁

髪結はそゝろに哀を催すゝ　末
去御小姓に一首さし出し　恕
人しれぬ横目の中をもやはらけて　翁
巾着切もあふく君か代　俊
大よせの芝居は松にそ祝ひける　恕
あねはといふは小勝ならまし　末
其末にせいの幽な男有　俊
庭はたゝきの前切〳〵　翁
此釜のはや鳴出てのたまふやう　末
別して吉備津の氏子繁昌　恕
仕合はいよ〳〵眞かね吹付る　翁
大工一代花にそ有ける　俊
日光の山にかゝりし夕霞　恕
折敷にすへて出す春の月　末
見來に任せて歸る天津鴈　俊
猶御茶湯の時を期し候　翁

只今は愛宕へ預し雪の景　末
峯にや有らん坊様の留守　恕
をし込て早入逢のかねの聲　翁
川をやす〳〵わたる熟靈　俊
物おもひ嶋田の宿に今宵しも　恕
扨きぬ〳〵や又ふとんはり　末
彼卿もさすか平家のたんたら筋　俊
俊成感涙ねちしほらるゝ　翁
夕されは野へのあくひの身にしみて　末
も來る筈しやか松虫の聲　恕
半道に近い契の月もふけ　翁
十四五丁のよゝのむつ言　俊
鐵炮の玉の臺も何ならん　恕
よしや稻留たゝよしや只　末
細川も聞ぬふりしておはします　俊
公方はれたるいつものそ忽　翁

東山尤山類これは扨　末
爰にかしこに人家有けり　恕
花柳新地ひらきの所とて　翁
大振舞のつゝく藤か枝　俊

旨恕　廿五句
次末　廿五句
梅翁　廿五句
對州河野氏
定俊　廿五句

追加

江戸櫻雲介となん飛れけり　梅翁

こつちまかせい京までの春　任他
御案内山又山の雲消て　旨恕
眞先にたつ朝霞なり　翁
月影もうすう成行ほんのくほ　他
十筋はかりになひく糸萩　恕
小男鹿もひよろり〳〵の道の末　翁
油をこほす露の夕暮　他
秋風の至た上の打紙なり　恕
行成やうの物思ふ比　翁
寛弘の時より涙か落初て　他
久〳〵吉野によう御座つたそ　恕
降雪も面白過る程までも　翁
なかりけりにて明るしのゝめ　他
酒樽もころりとこけてねた所　恕
おほろ月夜の毛氈一枚　翁
花もうしわさくれ博奕の左迂に　他

付たり遊女鳥のさえつり　恕
われ物もあはんとそ思ふ夕霞　翁
戀の山路の梅ほしの實　他
紫蘇の葉の忍ふとすれと色に出　恕
風をさつての袖のしら露　翁
なき跡は火のつい消たことく也　他
次第〳〵の香かきこえぬ　恕
其つんほ十双倍に成にけり　翁
隱居の望まけは御座らぬ　他
莚しきをかしやるならはをかしやれい　恕
揚屋かよひはかならす〳〵　翁
川風に沖津白波二挺たち　他
なかるゝ月やあつはれ强弓　恕
質種の色〳〵しのふにとらするそ　翁
たふれてのきし軒の下露　他
大芝居虫のねはかりや殘らん　恕

七本松に風さはく也　翁
花の陰折ふし幕串あらされは　恕
霞のひまに御目にかゝれる　他

十二句

梅翁
肥前枝吉氏　任他
旨恕　同
同

「難波風」解説

瀧田貞治

一

『難波風』は片岡旨恕の撰ぶところ、刊年及び刊行書肆名の印記はないが、自序に延寶六戊午八月日とあるから、延寶六年の刊行であることが分る。序に、

先集草枕の夢も見つがで二とせあまり程ふるを

とある『草枕』は、同じく旨恕の撰著で、綿屋文庫に藏さるゝもの、梅翁・旨恕・元順・西鶴・意朔・如貞・昌數・本秋・未連・季吟・湖春・信章・重安・西舟・西夕等に依る兩吟・三吟・四吟の歌仙九卷を收めたものである。『草枕』には『難波風』同樣自序はあるが、年號がなく、從つてその刊年は不明である。然し『難波風』の序文により、兩書の刊行が二年餘を閲したことが判然とし、『草枕』は大體延寶四年の交と見てよいのではないかと思ふ。

一

『難波風』は横本上下二冊。上巻二十丁、下巻は、上巻との通し丁になつてをり、何鯉の二十一丁にはじまり四十二丁で終つてゐる。柱題もなく、巻序を示す上下の文字も無い。『草枕』を紹介された杉浦正一郎氏に依ると綿屋文庫本は完本でないと言はれたが、恐らくその書の形式は、『難波風』と同じく上下二冊で而も通し丁附であつたものであらう。本文の書體も二書同一のやうである。但しその板下が旨恕であるかどうかは今言明し兼ねる。手鑑短冊類で見ると旨恕の手蹟とは異るものがあるやうである。

三

本書の内容をなすものは百韻十巻と追加に歌仙一巻が添へてある。而して各巻の發句に花及び月が順次詠み込まれてゐるので、本書を「花月十百韻」ともいはれた。内題にその文字があり、柳亭種彦も本書底本の表紙にそのことを朱記してゐる。作者は撰者の旨恕をはじめ、梅翁・任口・貞因・西鶴・昌本・保友・次末・以仙・如見・胤久・友雪・宗先・幸方・空翠・重直・幾音・益友・宗恭・春良・吉眞・定俊・任他等で、旨恕は各巻の席に侍つて最も句數が多く、梅翁の一五三句それに次ぎ、西鶴は何馬の四吟一巻に二十五句を見せてゐるに過ぎないが、本書が特に梅翁の研究資料としても尊まれてよいと思ふ。なほ地方在住の見馴れぬ俳士もをり、これらがこの年代に於ける談林弘通の限界を知らせて與れるのも有りがたいことである。

本書の俳風は洵に輕快・瓢逸・滑稽でその付け方が如何にもたのしくなだらかであるのが特徴をなしてゐると思ふ。

四

撰者片岡旨恕は、『俳家大系圖』には宗因門として、次ぎの如く出てゐる。

片岡氏、通稱庄二郎、松舟軒、或松門亭ト號ス。浪花堂嶋ニ住ス。始ハ季吟門弟ト云フ。好色旅日記五巻ヲ著ス。（俳書ニアラズ）

延寶六年刊の『物種集』、表紙裏に印記された大坂中俳諧月次日のうちに、九日として「天滿旨恕畫會」と見え、『國花萬葉記』には、「堂島片岡旨恕」とある。家書に本書『難波風』及び『草枕』、延寶七年の『わたし船』等があり、『俳家大系圖』によれば浮世草紙『好色旅日記』も彼の述作の由である。

『難波風』は流布甚だ少なく、底本とした本書以外に存在が知られてゐず、今まで本書について言及した研究も無い。天下の孤本といつても徒らな誇張の言ではない。底本はもと上田萬年先生の架蔵されたものであるが、上下兩卷の卷頭には、寫眞に示した如く諸家の藏書印が羅列押捺されてゐ、本書が如何に稀覯書として取扱はれて來たかを如實に物語つてゐる。

分銅形に牘庫とあるは『藏書印譜』に依れば、

内藤風虎、奥州磐城平領主名義泰號風鈴軒學宗因善俳歌、享保三年五月二十九日歿享年六十七

とあり、本書の最も古い所藏者であつた。「此ぬし浮世本かき種彦」は言ふ迄もなく初代種彦であり、彼は、本書上卷表紙に朱で、「花月十百韻　延寶六年印本」と自記してゐる。萩原乙彦は戯作者梅暮里谷峨のこと、月並宗匠としても名があり、明治十九年迄生きてゐた。「福田文庫」は粒よりの奇書珍籍を多く收藏してゐて有名であり、この藏印はそれだけで書物の價値を保證するものとなつてゐる。英王堂がチェンバレーンであることはあまねく人の知るところ、而してチェンバレーンから上田先生の所に移つたのである。

なほ本書には題簽の所と、下卷卷尾に藏印が見える。題簽上の印は今遽かに判讀出來ず、從つてその主が分らない。下卷卷尾のは「樂蔭圖書」といふ隸書方印のもので、『藏書印譜』にも見えてゐない。然しこの主が藏書家であつたらしいことは、私の藏する儒者劉文翼手澤蜀山人識語入り舊藏、福田文庫存印の『懷風藻』の卷末に、

此本一冊慶應三丁卯年六月十日收之源敬同 樂蔭圖書

と同一の印が押されその姓名が記されてゐる。但しそれが如何なる人かは不明である。

本書が上田先生の藏となつて、先生は、上卷の表紙裏に、墨筆で

難波風　延寶六板
足薪翁隨筆　廿九オ
上十六オ　小哥にも——
雪ては——
下三十七ウ　ちりてれ——
花そち——

と自記された。これは本書が種彦の『足薪翁隨筆』廿九丁オモテに引用されてゐ、それは、『難波風』上卷十六丁オモテの「小哥にも」の句、及び下卷三十七丁ウラの「ちりてれ」の句

18635

の所であることを示したものである。上田先生はその他隨所に言語乃至は風俗文化資料となるべき箇所を發見して朱點を打つてをられるが、先生がコッ〳〵と、かういふ俳書に迄目を通してをらるゝさまが見られ、そゞろに頭のさがる思ひがする。底本が稀覯であるので、本書にまつはる歴史をかへりみ、それら諸家の手澤藏印等も特に原色コロタイプとして卷頭に掲げた次第である。

昭和十八年十月八日大詔奉戴日の夜　臺北にてしるす。

西鶴俳諧叢書第三卷

風波難

昭和十九年一月十日印刷
昭和十九年一月十五日發行

定價五圓貳拾貳錢
行爲稅拾八錢
合計金五圓四拾錢

五〇〇部限定

編著者　瀧田貞治
發行者　中村赤次郎　臺北市榮町二ノ一五
印刷者　青木秀巳　臺北市榮町二ノ一五
發行所　臺灣三省堂　臺北市榮町二ノ一五　振替臺灣一〇四二〇

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

臺灣三省堂內　西鶴學會　企畫

臺灣出版印刷株式會社印行

終